

追 悼



明 石 謙

1934 年 12 月 21 日（誕）

2005 年 11 月 5 日（逝 70 歳）

前 川崎リハビリテーション学院長

川崎医科大学名誉教授

川崎医療福祉大学特任教授

略 歴

1959 年 3 月 岡山大学医学部卒
 1960 年 7 月 岡山大学医学部附属病院整形外科入局
 1961 年 1 月 香川県立ひかり整肢学園
 1963 年 7 月 米国セントフランシス病院
 1964 年 7 月 米国ニューヨーク大学リハビリテーション医学研究所
 1967 年 2 月 岡山大学医学部附属病院整形外科助手
 1969 年 7 月 岡山大学医学部附属病院理学療法部講師
 1975 年 4 月 川崎医科大学教授
 1975 年 4 月 川崎医科大学附属病院リハビリテーション科部長
 1976 年 4 月 川崎医科大学大学院医学研究科教授
 2000 年 4 月 川崎医科大学名誉教授

1995 年 4 月 川崎医療福祉大学教授
 1995 年 4 月 川崎医療福祉大学リハビリテーション学科学科長
 2005 年 4 月 川崎医療福祉大学特任教授

1975 年 4 月 川崎リハビリテーション学院副学院長
 1984 年 4 月 川崎リハビリテーション学院学院長
 1999 年 4 月 専門学校川崎リハビリテーション学院学院長
 2004 年 4 月 専門学校川崎リハビリテーション学院顧問

学会活動

1969 年 日本リハビリテーション医学会評議員
 1977 年 日本リハビリテーション医学会理事
 1980 年 日本リハビリテーション医学会学術集会大会長
 1982 年 日本リハビリテーション医学会監事
 1984 年 日本リハビリテーション医学会理事
 1994 年 日本リハビリテーション医学会常任理事
 1985 年 中国四国リハビリテーション医学研究会理事
 1988 年 第 16 回世界リハビリテーション会議ポスト
 コンgressセミナークラシキ会長

他の団体役職

1992 年 全国理学療法士・作業療法士養成施設連絡協議会会長
 1994 年 私立学校理学療法士・作業療法士養成施設連絡協議会理事
 評議員：日本災害医学会，日本義肢装具学会，日本靴医学会，日本脳波・筋電図学会

明石 謙君の思い出

吉備高原医療リハビリテーションセンター名誉院長
武智 秀夫

ここでは長年呼びなれた明石君という呼びかけで追悼文を書くことをお許し願いたい。

明石君に始めて会ったのはアメリカに行く直前のことで、「これから船で行くんですわ。」と言ったのを憶えている。アメリカで、リハビリテーション専門医の試験にパスして昭和41年暮帰国し、すぐ岡山大学に勤めた。お互いに留学の話をしているうちに、義肢装具のことが話題になった。そして共著で「義足・第一版」を昭和43年に医学書院から上梓した。その後共著で6冊医学書院から出版してもらった。この頃一緒に多くの仕事をした。思い出は多く、とても書ききれない。

昭和50年明石君は川崎医科大学リハビリテーション医学の教授になり新しい教室を主催し、内外に数々の業績を上げた。リハビリテーション学院（PT・OT養成校）校長も兼務し巧みに運営に当たった。

また41年年末から二人は一緒に岡山県身体障害者更生相談所で週1回、義肢装具の処方・適合などの業務を担当した。ここの仕事も明石君の役に立ったと思う。途中から長島弘明君が加わり、長い間三人は毎週1回顔を合わせていた。

昨年1月まで明石君は病をおし、ロフストランド杖をついて来てくれていた。だから私たちは明石君の闘病の様子を始めからみんな知っている。痛ましかった。私たちはとてもつらい思いをしたことを思い出す。明石君は最後まで人生に忠実であったと思っている。

趣味は広く、とても高尚であった。ヴァイオリンを奏で、学会で外国に行くときよく楽器を買ってきた。スコットランドのバグパイプとホルメザン作のヴィオラを見せて貰ったことがある。長尾竜郎先生（ヴァイオリン）、明石君（ヴィオラ）、私（チェロ）、土肥信之君（ピアノ）でモーツァルトのピアノ四重奏曲のある学会で演奏したこともあった。また外国の古い挿し絵入り本（Livre illustréと言うのだそうだ）を集めていた。3、4年前、自宅の隣に建てた背の高い優雅な書斎と沢

山の本を、長島君と見せてもらったことがある。頼山陽ゆかりの開谷高校で学んだせいかな、難しい漢語の知識も豊富であった。酒を愛し、酔うほどに学問の話、オペラのこと、本の話などを語り、決して崩れることはなかった。

私の好きなGoetheの言葉がある。それは“Edel sei der Mensch, hilfreich und gut”というものだ。「人は高潔で、人助けをし、善でありたいものだ」といった意味だと思う。

明石君との長いつきあいを思うとき、いつもこの言葉を思い出すことだろう。

合掌

明石 謙先生を悼む

日本障害者リハビリテーション協会顧問
上田 敏

明石謙先生がお亡くなりになったと聞いてほとんど耳を疑った。しばらく前にお会いしたときにはお元気であったし、70歳という、今の人生80歳時代にはまだまだ若いと言わねばならない年齢であったからである。大切な友を突然失ったという感じである。ともあれ思い出をつらねて、心からご冥福をお祈りするよすがとしたい。

先生と初めてお会いしたのはアメリカに二人とも留学していた時のことである。古い日記帳を書棚の奥から発掘して調べてみると、今から40年以上前の、1964年6月8日のことになる。そのとき私はニューヨーク大学のDr. Ruskのリハビリテーション医学研究所に留学していたが、早めの夏休みを1週間もらって、家族で米中西部のバス旅行を楽しんだ。その時Ruskのもとで学んだ大先輩のDr. NovakをビッツバーグのSt. Francis Hospitalに訪ね、そこで全く予期せぬことに明石先生にお会いしたのである。聞くと、ここでの研修は間もなく終わって、7月からはなんとニューヨーク大学に来られるのだという。お互いに心強く、再会を約して別れた。

ちなみにこのSt. Francis Hospitalは、古くからある市

中心部の総合病院に、病棟をもつリハビリテーションセンターが併設されて廊下でつながれ、一般病院とリハビリテーション専門病院との両者の強みを生かして、機能分担と連携が非常によく行われていたところで、日本に帰ってからの私の「地域住民近接型リハビリテーション」の理想像となったところである。

先生がニューヨークに来られてからは、独身の気軽さで先生はよくわれわれのアパートに遊びに来られ、先生のフォルクスワーゲンにただで乗せてもらう代わりに、こちらは日本食のお弁当を準備するというかたちで、ニューヨーク郊外はもとより、南はプリンストン経由フィラデルフィアまで、北はカナダ国境に近いアディロンダック山地まで（2泊）など、非常に楽しい旅をした。

私は一足お先に日本に帰ったが、間もなく先生も帰国され、今度は日本のリハビリテーション医学を築く同志としての協力が始まった。それからの先生の活躍は、弱冠40歳で新設の川崎医科大学のリハビリテーション科教授となられたこと、若手（当時の）で最初

の日本リハビリテーション医学会会長に46歳の若さで就任されたことをはじめ、多くの人を知るとおりである。著書も多いが、何といても「運動学」（医歯薬出版、リハ医学全書4、1973）が最大の主著であろう。その業績のなかには本誌「総合リハビリテーション」の創刊も含まれている。

先生は岡山での暮らしが長かったが、生まれ育ちは京都の方である。私はかねがね京都人は日本で唯一の都会人だと思っているが、先生も常にやわらかい物言いとユーモアのなかに、ピリツとなにがしかの皮肉をにじませるところなど、まさに典型的な都会人であった。洋服の選択や着こなしにもセンスがあった。音楽を愛し、ご自分でもヴィオラを奏し（ヴァイオリンのような目立つ楽器でないところも先生らしい）、残念ながら聞き逃したが、学会でピアノ四重奏を演奏されたこともあるという。

思い出には限りがない。その早すぎるご逝去をいたみつつ、安らかに眠られることを祈る。